

研究テーマ	〔Ⅱ 材料などのよさや可能性を豊かに感じ取る造形教育を考える〕 知識と表現の融合から達成感を味わうためのモチーフ設定 —中学1年生「6月の若葉を三原色で描こう」の実践を通して—
-------	--

結城市立結城中学校 講師 松葉谷 文子

1 研究テーマについて

本校の生徒は、入学当初のアンケート結果からも、色を使った作業は好きだが、下描きで上手くいっていても色塗りで失敗するという経験が小学校から多いようである。その経験から驚くほど着彩作業に対する苦手意識が高いことが分かった。また、写実的な作品への評価がどうしても高いという概念が生徒達の中で、既に定着してしまっているという状態にあり、その事からモチーフを観察し観念的にならず表現できる人と、よく見るという行為が苦手な人との差が大きくなってしまい、「絵を描く」という行為自体に自信を持ってない生徒も多い。本来、自身の中から出る物を表現する事によって、自己発現をし、人間性の成長を図る事ができるのが「表現」の特質である。しかし、生徒が「表現」自体に苦手意識を持ってしまっていると、制作によって自己肯定感を味わう事ができず、美術本来の教科の特質が活かされない。

そのため、まずは、この苦手意識を払拭し、生徒達に達成感を味わわせ、自身の制作や作品への自信を持ってもらう事が一年生の課題で最初に必要な事である。

事前にモチーフをよく観察し「見る」という意識を植え付ける事や、色や着彩に必要な専門知識と技法の基礎・基本を徹底して学習する。また知識の理解を実際に表現活動を使って行う事で、より具体性をもった知識として定着させる事ができる。

その知識や技法を使って制作に入る事で、個々の技術の差が出にくく、制作を通してさらに知識・技法の確認、応用をする事が可能になる。つまり、漠然とした知識の中で理解していた原色から中間色を創るという概念を、実際に体験させることで知識と表現が結びついたものであることが認識できるのである。

個々の技術の差が出にくいという事は完成作品から達成感を味わいやすく、自己の「表現」活動に対する肯定感が得られやすいといえる。これは自己の「表現」への自信へとつながり、能動的学びの原動力にもなるはずである。

さらに、手に取れる身近な自然物を塗る事によって、「見る」という行為が行いやすく、また固有色が多岐にわたるため、混色で創り上げた色の有意性と、写実性は確かな観察からなされるものだという事を制作を通して実際に体験することができる。

こういった課題設定やモチーフ選択から生徒達の意識を変え、美術科本来の自己表現を通して自己発現し、豊かな人間性を養える授業展開をしていきたいと考える。

2 実践例

(1) 題 材 6月の若葉を三原色で描こう

(2) 題材目標

授業で学習した、色や着彩に必要な専門知識と技能をしっかりと理解し丁寧に着彩することによって、写実的に作品を制作し着彩作業に対する苦手意識を無くす。

自然物を塗る事によって、混色で創り上げた色の有意性と、固有色を再現するためのモチーフを観察する必要性を理解し、また、制作におけるオリジナリティの素晴らしさを体験する。

(3) 題材について

① 題材観

色についての学習はどうしても知識理解の部分が多くなってしまいが、習った知識を活かして実際に混色し着彩することによって、概念的知識だけでなく三原色から無限の色を創り出すことができるという事実を、

実体験を通して改めて理解することができる。また、絵の具の単色の色では表現できない自然物の着彩を通して、混色し自分だけの中間色を創ることの重要性を理解し、今後の着彩表現に幅を持たせることができる。さらに、概念的知識を具現化するために必要かつ適切な知識・技能を身に付けさせ、作品に対する責任感や丁寧に取り組む姿勢を育成することをねらいとしている。

② 生徒観

本学級の生徒は活動的で挙手も多く、意欲的に授業に取り組んでいる。美術に関しての興味関心も高く制作を楽しんでいる生徒が多く見られる。

本学級の生徒33名（男子17名、女子16名）に対して、実態調査を行った結果は次の通りである。

平成25年4月24日の調査

質問項目	回答(人)	
1 三原色をっていましたか。	はい 4	いいえ 29
2 色塗りは得意ですか。	はい 7	いいえ 26
3 それはなぜですか？	・楽しい/面白い 6 ・仕上がりが楽しみ 1 ・難しい 14 ・疲れる 2 ・失敗する 10	

色に対する専門的知識があまり確立しておらず、作品制作においては着彩作業に対する苦手意識が高いことが分かった。色を使った作業は好きだが、下描きで上手くいっていても色塗りで失敗するという経験が多いようである。

③ 指導観

色や着彩に必要な専門知識と技能をしっかりと習得させ、正確に着彩させることによって色塗り作業に対する苦手意識を和らげ、自信を持たせ、その後の制作につなげていきたい。

また漠然とした知識の中で理解していた原色から中間色を創るという概念を、実際に体験させることで知識と表現が結びついたものであることを認識させたい。さらに、自然物を塗る事によって、混色で創り上げた色の有意性と制作におけるオリジナリティの素晴らしさを実感してもらいたい。

(4) 題材の評価基準

美術への関心・意欲・態度	発想や構想の能力	創造的な技能	鑑賞の能力
・自然物の特質をよく理解することができる。 ・色の原色を理解し、習った知識を活かして三原色の意義を体験しようとする。	・色の三原色を正しい割合で混色しきちんとモチーフに合った固有色と技法を選択することができる。	・自然物であるモチーフをよく観察し、特質を理解しながら写実的に表現することができる。	・自身の作品及び他の作品に対して構想的観点から鑑賞をし、言葉によって表現することができる。

(5) 指導と評価の計画（3時間扱い、本時は第2時）

次	学習内容	時	評価の観点				評価規準
			関	想	技	鑑	
1	モチーフを正確に下描きし、線で特色を表現する。	1	○	○	◎		・モチーフをきちんと観察し、特質を把握できる。 ・葉の特色を、線で正確に描くことができる。
2	三原色と習った技法を使ってモチーフを写実的に着彩する。	②, 3	○	◎	○	○	・色の混色を理解し、意欲的に体験しようとする。 ・混色を正しく行い美しい中間色を創り出し固有色を表現できる。 ・技法を使って正確に着彩することができる。 ・正しい自己評価と鑑賞ができる。

(6) 本時の展開

- ① 目 標 原色を混色し創り出した中間色で正確にモチーフを着彩できる。
- ② 準備・資料 スケッチブック, 4B鉛筆, 水彩絵の具のセット, 4種類の葉
- ③ 展 開

学習活動・内容	教師の指導・支援と評価(◎は個への対応)
1 本時の学習課題を確認する。	・三原色の性質と前回学習した技法を確認し直し本時の動機付けをする。
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 0 auto;">6月の若葉を色の三原色で描いてみよう。</div>	
2 着彩の方法を確認する。 (1) 三原色の使い方についてのルールを確認する。 (2) 使う技法について確認する。	・三原色の使用方法や技法について説明する。 ・実演し, 技法に様々な可能性がある事を視覚的に確認させる。 ◎ 意欲的に授業に参加し正しい知識を理解できる。(挙手や発表の態度)
3 次の要領で実際にモチーフを塗る。 (1) 原色同士を混色し, 適した中間色を創る。 (2) はみ出さない塗り方を確認する。 (3) はみ出さないように輪郭線から塗っていく。 (4) モチーフに適した技法を自分で選択し塗る。	・実際の手順を説明する。 ・焦らずにじっくりと丁寧に取り組むよう助言する。 ・オリジナリティを発揮できるよう, 色々なアイディアを紹介しながら自由な発想を促す。 ◎ 一人一人の作業を確認し, できていない生徒には教師が個人的に助言をし, 模範をみせる。 ◎ 理解した知識を使って正しくモチーフを着彩することができる。(着彩・混色・技法の正確性を評価する。)
4 完成した作品を互いに鑑賞する。	・同じ技法でも様々なアプローチがある事を認識させる。
5 次の課題の着彩の方法を確認する。	・参考作品の良い部分と失敗している部分を確認し, 具体的な目標と失敗例を理解させる。 ◎ 図説を明確にし, 全員が理解できるよう視覚的効果を使う。
6 実際にモチーフを塗る。 (1) 原色同士を混色し, 適した中間色を創る。 (2) はみ出さない塗り方を確認する。 (3) はみ出さないように輪郭線から塗っていく。 (4) モチーフに適した技法を自分で選択し塗る。	・実際の手順を説明する。 ・次の課題につながるよう取り組み方に関しても助言する。 ◎ 一人一人の作業を確認し, できていない生徒には教師が個人的に助言をし, 模範をみせる。 ◎ 理解した知識を使って正しくモチーフを着彩することができる。(着彩・混色・技法の正確性を評価する。)
7 完成した作品を互いに鑑賞し, 本時の学習をまとめ, 次の学習課題を確認する。	・それぞれの作品をお互いに褒め, 自身の作品への達成感を味わわせ, 次の学習につながるようにする。
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 0 auto;">習った技法を使って若葉を完成させよう。</div>	

3 成果と課題

この学習にはいくつかの利点がある。一つは、学習した知識を「表現」を通して復習・体現できるので、より明確に知識や技法の定着を図る事ができるということ。二つ目には、基礎・基本が身に付いた状況での制作のため、個々の技術の差が出にくい課題であること。また、この利点から一年生の学年的課題である、「表現」に対する苦手意識を和らげる事ができること。そして、苦手意識が和らぐ事によって生徒がよりの主体的に「表現」活動に取り組み、完成した作品によって自己肯定感を得、自己発現へとつながるということ等である。

そして、こういった課題で生徒達の意識が変化することによって、次時の作品への意欲付けとなり、二年生、三年生へと学年があがる毎に、自己を表現しようとする態度が育成され、より深い「表現」活動を行うことができる。

課題としては、自由な心の動きや個性、感じ方などの「表現」活動とは切り離せない部分が学習しづらい所である。しかしながら、一年生という、中一ギャップや生徒の課題に合わせつつ、題材選択や選択時期などで美術の持つ教科の特質を活かしていければと考える。